

「デジタル・アーカイブ速報」No.17

岐阜女子大学

〒501-2592 岐阜市太郎丸 80
フリーダイヤル 0120-661184
URL <http://www.gijodai.ac.jp/>

岐阜女子大学大学院

☆通信教育事務室
〒500-8813 岐阜市明徳町 10 番地 杉山ビル 4F
TEL 058-212-3257 FAX 058-212-3258
URL <http://www.gijodai.jp/graduate/>

デジタル・アーカイブの情報カテゴリーとしての 位置、地名記録の課題 ～位置、時間、史的内容（地名）で構成するメタ情報～

近年、地域にのこる文化遺産－文化財、文化活動などのデジタル・アーカイブ化が行われ、それらは重要な資料情報として、歴史や観光、教育、学術研究など多様な分野での利用がなされています。その記録内容も、時間（いつ）、位置（どこで）、内容（なにを）といった資料の基礎情報を基盤としており、中でも、位置情報については、GPS を利用した緯度、経度、高度をはじめとして、時刻や撮影方向などの正確な記録を行い、さらに、周辺的环境情報として、気温（温度）や風の向きなど、自然状況の記録も併せて行われています。

GPS を利用した正確な位置情報記録については、本速報でも、富山県五箇山、長良川花火などの撮影、記録における実践について報告しておりますが、後藤忠彦ほか（2007）「GPS を用いた映像資料の位置情報の記録－デジタル・アーカイブ化の基礎資料として－」（日本教育情報学会教情研究 EI07-4 pp.13-20）、谷里佐ほか（2008）「位置・方向・地図等の位置情報カテゴリーで構成する地域資料データベースの検討」（日本教育情報学会教情研 EI08-1 pp.22-27）などにおいても、その必要性および実践、データベースへの適用などについて研究報告がされています。

このような、GPS を利用した緯度、経度などの位置情報記録は、従来の位置情報記録であった「地名」および施設名などの記録が抱えていた課題－自然現象による地形の変化、市町村合併などによる地名の変更などにより、その情報が不確かになる点－を補完するものであるといえます。

しかし、当然ながら、緯度、経度などの正確な記録がなされれば、資料の位置情報の記録が完全なものとなるわけではありません。そこには、従来、記録されてきた「地名」との関連性があるからです。以下、GPS 位置情報と「地名」との関連性および情報管理の課題について報告します。

GPS 位置情報と「地名」

（1）過去から未来への情報空間軸

一般的に、資料の記録項目の基本とされるのは、いつ、どこで、なにを、にあたる時間、位置、内容であり、それらが、過去から現在、未来へと繋がる資料の情報空間における基盤情報となります。

この、過去から現在、未来の情報空間には、軸となるものが必要であり、それを各種の変化に

左右されない GPS 位置情報と規定すると、たとえば、現在、記録された資料が、ある時間（過去）にはどの位置（「地名」）であったのかがわかり、そこから導き出された「地名」その他により、その史的 content、歴史的 background もその範囲には曖昧さはあるが、明らかにすることができる。（図 1）

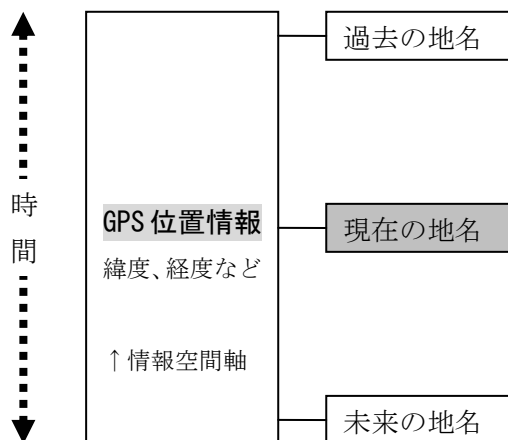


図 1 GPS 位置情報と地名との関係

（2）事例 1 「奥の細道むすびの地」

「奥の細道むすびの地」は、俳人・松尾芭蕉が元禄 2（1689）年の秋に、約 5 ヶ月にわたる「おくのほそ道」の旅を終えた岐阜県大垣市船町周辺を指します。この地で、芭蕉は「蛤のふたみに別れ行く秋ぞ」とむすびの句を詠み、舟に乗って、新たな旅路へとむかいました。現在、その場所（および周辺）は、芭蕉のむすびの句などの句碑や、記念館などとともに町並みが保存されています。

さて、例えば、「奥の細道むすびの地」の蛤塚（むすびの句碑）を GPS 情報および「地名」で記録すると以下ようになります。（図 2）



GPS 情報

句碑の位置 N 35° 21′ 21.42″
E 136° 36′ 44.38″
撮影位置 N 35° 21′ 21.24″
E 136° 36′ 45″

地名情報 岐阜県大垣市船町 2 丁目

図 2 蛤塚の位置情報

図 2 で示したように、GPS 情報では、句碑の位置およびそれを撮影したカメラの位置をそれぞれ計測し、地名情報は、現在（2009 年）のこの地の地名である岐阜県大垣市船町という記録ができます。

そして、船町という地名の過去から現在までについても、地名の変遷があります。角川書店『日本地名大事典 21 岐阜』より船町の項を以下に抜粋します。

〔由来〕

もとは、南寺内村、切石村のうちであり、町名は、家並みの前を流れる川に船が通っていたことによるという。

[近世] 江戸期～明治初年

江戸期は、美濃国安八郡、大垣城下町の一つ。江戸初期より水門川の運輸業が始まり、船町港が発展。航行の安全のために、住吉明神を移遷した。明治初（1868）年には、東船町、西船町となる。

[近代] 昭和18（1943）年～現在

もとは、東船町、西船町、西水主町の全部と東水主町の一部。1～7丁目がある。昭和51（1976）年2・4丁目の一部が馬場町となり、寺内町・俵町・馬場町の各一部を編入し、現地域を確定。

以上の通り、現在の船町という「地名」は、昭和18年からであり、その後も町の編入などの変化がなされていることがわかります。また、その名前には、川に船が通っていたという由来があり、芭蕉がこの地を訪れた近世（江戸期）には、船町港として発展していたという、歴史的な背景を感じ取ることができます。

（3）事例2 ー世界遺産白川郷ー

さらに、GPS位置情報と「地名」との関連について、世界遺産白川郷での記録を例としてとりあげ、前項と同様に地名辞典から抜粋します。

[由来]

飛騨地方西部を北流する庄川流域に位置し、西端の白山連峰をはじめ2,000m級の山々に囲まれている。地名の由来は、白山の白水谷に発し当地を流れる大白川の水色が常に濁り白く見えることによるという（後風土記）。

[古代] 白川荘

平安末期に見える荘園名。飛騨国のうち。（略）古代以来飛騨国の中心は中央を南北に縦貫する益田川・飛騨川に沿う地域にあり、飛騨西部の庄川流域は、1,000～2,000級の山々に囲まれておのずから隔絶された一世界を形成していたと考えられる。

[近世] 白川郷

江戸期の地域称。飛騨国大野郡のうち。庄川およびその支流の溪谷部に発達した村々を総称する。（略）

[近代] 白川村

明治8年～現在の飛騨国大野郡の自治体名。江戸期に白川郷と総称されていた大野郡42か村のうち、（村名略）23か村が合併して成立。明治9年岐阜県に所属。



図3 山に囲まれた白川郷（左 稲架小屋方面からみた和田家／右 板蔵方面からみた和田家）

白川という「地名」の由来、古代からの特徴から、“白山”（山々に囲まれた地域）とのかかわりがみられますが、そうしたことは、和田家を様々な地点から撮影した記録にもあらわれていません。(図3)

また、これらの正確な位置情報記録のため、撮影したカメラの位置情報（緯度・経度など）のみでなく、撮影の様子を記録したカメラの位置情報（緯度・経度など）をともに記録することが必要となります。(図4)



図4 東側からみた和田家（左 撮影記録／右 撮影状況の記録 ※GPS 位置情報とともに記録）

今後の課題

事例からも窺えるように、「地名」は歴史と共に変わり、また、歴史的背景を持つものといえます。そのため、「地名」が各時代（時間）において、どの辺りのエリアを指していたのかを再現できることが位置情報としては必要となり、再現するための基準となるものがGPS情報であるといえます。そのため、情報管理の際には、これらの関連性を加味した記録、管理が必要となります。

GPS情報を軸とし、過去と現在、未来を繋ぐことは、記録の際に、なぜ、GPS情報の記録が必要であるかにこたえる理由の一つでもあります。

今後の課題としては、これらの情報管理として、GPS情報を見出しとし、「地名」情報と対応させるデータベースのための辞書の開発や、GPS情報の記録方法、その精度の検討、また、温度など環境情報との関連などが挙げられます。例えば、GPS情報の精度については、受信している衛星の番号、位置、受信状態などを表示する受信機やデジタルカメラなども出ています。(図5)

こうした様々な課題についても、個々に検討する必要があります。



図5 GPS測位の様子（受信機）

ぜひ、各分野におけるGPS情報と「地名」との関連についてご検討いただき、ご意見などいただければ幸いです。

(文責 谷 里佐)